

波打際

いつかきっと分かってもらえると信じたい
これはひとつの自負でもあるだろうか
また、ひとつの蜃気楼でもあるだろうか

それでもやはり確かに在るのです
ひっそり手の中に温めていよう
そして、ゆっくり捜してみよう

いつか必ず出会えると信じたい
きっとそれはすぐ傍にある
かすかに息をしているに違いない

季節を告げるために咲く小さな花のように
ひっそりと暮らしていこう
静かに、そして微笑を失わずに

こうした想いにゆっくり歩き出すのはいつも
寄せては返す潮騒の中
薄日の降り注ぐ――波打際

(1984.4.28)